北海道指定史跡

シブノツナイ竪穴住居跡

発掘調査概要報告書（2021 年度）

史跡内容確認のための調査

湧別町教育委員会
2022. 3

例　言

1．本書は令和３年度に湧別町教育委員会が実施した、北海道指定史跡シブノツナイ竪穴住居跡の発掘調査概要報告書である。
2．本書の編集・執筆・写真撮影・写真図版作成は湧別町教育委員会社会教育課ふるさと館 JRY・郷土館の林勇介が担当した。
3．遺跡位置図､竪穴住居跡分布図など挿図は任意縮尺とし､各図にスケールを配置した。
4．調査の記録及び出土資料は、湧別町教育委員会で保管する。
5．土層の色調表記は、農林水産省農林水産技術会議事務所監修・日本色研事業株式会社発行の『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編1967、33版2010年）による。
6．基準点測量、トータルステーションシステム・遺跡管理システムなどの測量機材の借用及び測量機材操作指導については㈱シン技術コンサルに委託した。
7．火山灰同定はアースサイエンス株式会社に委託した。
8．放射性炭素年代測定は、株式会社パレオ・ラボに委託した。また、國木田大氏（北海道大学大学院准教授）の協力を得た。
9．炭素・窒素安定同位体比測定は、株式会社パレオ・ラボに委託した。
10. 調査及び整理報告にあたり、下記の諸機関及び個人からご指導・ご協力を賜った。記して感謝申し上げます（順不同・敬称略）。
文化庁文化財第二課、北海道教育庁生涯学習推進局文化財・博物館課、湧別町農業協同組合、北海道オホーツク総合振興局産業振興部林務課
熊木俊朗、國木田大、岡孝雄、斉藤慶吏、西脇対名夫、村本周三、種石悠、坂本尚史、柳瀬由佳、澤井玄、松田功、合地信生、熊谷誠、森久大、今泉和也

目　　次

例言
目次

1．調査の概要…… 1
(1) 調査目的…… 1
(2) 調査要項…… 1
(3) 調査体制…… 1
(4) 調査にいたる経緯…… 1
(5) 調査検討委員会…… 2
(6) 過去の調査…… 2

2．遺跡の位置と環境…… 2
(1) 湧別町の地理と遺跡…… 2
(2) シブノツナイ竪穴住居群の立地…… 4
(3) シブノツナイ竪穴住居群の概要…… 4

3．調査の方法と成果…… 4
(1) 調査区の設定…… 4
(2) 基本層序…… 7
(3) 発掘調査成果（概要）…… 7

4．普及活動…… 8

5．成果と課題…… 8
(1) 竪穴住居跡の時期特定と自然科学分析…… 8
(2) 今後の調査…… 8

引用・参考文献…… 9
報告書抄録 …… 10
写真図版 …… 11

1．調査の概要

(1) 調査目的

湧別町では、北海道指定史跡シブノツナイ竪穴住居跡の保護及び活用を進めるため、平成30年度から発掘調査を行っている。現在の調査目的は、遺跡の範囲や遺構の年代など内容詳細を明らかにすることである。今年度の調査目標は大型の竪穴住居跡の年代や内容を把握することとし、発掘調査で次の2点を試みた。1点目はカマドの検出、2点目は竪穴住居跡の年代が特定できる資料及び試料の収集採取である。

(2) 調査要項

調査対象	湧別町シブノツナイ竪穴住居群（I-21-35） 北海道指定史跡「シブノツナイ竪穴住居跡」（昭和42年3月17日指定）
所在地	紋別郡湧別町川西499-1･2,502-1･2,503,714,717～720,722-1～3,930,1056,1059-1番地
対象面積	139,462㎡
発掘面積	21.45㎡
発掘期間	令和3年7月15日～8月11日
整理期間	令和3年8月12日～令和4年2月28日

(3) 調査体制

調査主体者	湧別町教育委員会　教育長　阿部　勉
調査事務局	湧別町教育委員会社会教育課ふるさと館 JRY・郷土館 参事（兼館長）中島　一之、施設管理人　中原　明生
調査員	主任　林　勇介
調査補助員	地域おこし協力隊　増田　久美子
発掘作業員	菊地　俊文、中川　雅紀、野上　弘幸、茂手木　政則

(4) 調査にいたる経緯

北海道指定史跡「シブノツナイ竪穴住居跡」は平成26～29年度に北海道教育委員会(以下、道教委）が実施する重要遺跡確認調査の対象となり、北海道立埋蔵文化財センターの指定管理者である公益財団法人北海道埋蔵文化財センター（以下、道埋文）により測量と発掘調査が行われた。調査報告書では今後の史跡保存及び調査に求められる課題が示された。

道教委が平成28年度から開催している「北海道東部の竪穴住居跡群調査懇談会」(以下、懇談会）では、道埋文が実施するシブノツナイ竪穴住居跡の調査についても有識者により意見交換が行われてきた。平成28年度第2回懇談会は湧別町を会場として開催され、史跡保全のための意見交換や現地視察が行われた。

重要遺跡確認調査に関する道教委・道埋文・湧別町教育委員会（以下、町教委）の協議や懇談会において、町教委による計画的な調査の必要性が議論されてきた。町教委はその状況を踏まえ、主体的にシブノツナイ竪穴住居跡の保護を進める必要があると判断し、平成30年度から発掘調査を実施している。

(5) 調査検討委員会

今年度から湧別町シブノツナイ竪穴住居群調査検討委員会を設置し、委員に委嘱した外部有識者の方々に町の調査計画及び内容を検討していただいた。委員は熊木俊朗氏（東京大学大学院教授）、國木田大氏（北海道大学大学院准教授）、岡孝雄氏（株式会社北海道技術コンサルタント地質調査部長）の3名である。第1回会議は令和3年7月21日、第2回会議は令和4年2月22日に開催した。この他、斉藤慶吏氏（文化庁調査官）、村本周三氏（道教委主査）に現地指導を依頼し、令和３年10月15日に現地で調査内容について指導いただいた。

(6) 過去の調査

シブノツナイ竪穴住居群は昭和3年には郷土史研究家にその存在が知られており、昭和30年代には研究者の協力を得て町教委が発掘調査を行ってきた。現在までの調査歴は次のとおりである。

調査時期	調査主体	成　　果
昭和 38 年	湧別町教育委員会	竪穴住居跡３基（A, B, C 竪穴）を発掘。擦文土器等が出土。
昭和 41 年	湧別町教育委員会	竪穴住居跡２基（238, 318 号）を発掘。擦文土器等が出土。
平成 26 ～ 29 年	（公財）北海道埋蔵文化財センター	測量図（竪穴分布図）の作成。竪穴群の北側平坦地でトレンチ６か所を発掘。続縄文土器等が出土。
平成 30 年～	湧別町教育委員会	平成 30 年は竪穴群の北側平坦地でトレンチ２か所を発掘。続縄文土器等が出土。平成 31 年は竪穴群の北側平坦地、431 号竪穴の各トレンチ１か所を発掘。令和２年は大型の竪穴住居跡２基で各トレンチ１か所を発掘。擦文土器等が出土。

２．遺跡の位置と環境

(1) 湧別町の地理と遺跡

湧別町はオホーツク海に北面し、東はサロマ湖を囲む佐呂間町と北見市（旧常呂町）、西はシブノツナイ川を挟み紋別市、南は遠軽町と接している（図1上）。町の中心部を流れる湧別川は裏大雪山系の山並みの一つである天狗岳付近に水源を発し、北東に流れをとりながら山間を抜け遠軽に至る。そこで生田原川と合流し川幅を広げ、流れの方向を若干北に変え湧別の町を貫流しオホーツク海に注ぎこんでいる。オホーツク海に注ぎこむ河川としては常呂川に次いで大きく、市街地は湧別川が形成する扇状地を中心に発展してきた。

湧別川上流域である遠軽町白滝市街地の北方8km 地点には、国内最大規模の黒曜石原産地である赤石山がある。黒曜石は湧別川を河口まで流れ、それを素材とした石器は湧別町内で広く確認される。町内には旧石器時代からアイヌ文化期まで幅広い年代の遺跡が確認されており、その数は現在57か所となっている。遺跡の情報は道教委及び町教委が管理する埋蔵文化財包蔵地調査カードに記載・公開されているほか、詳細な位置や内容については道教委文化財・博物館課のホームページにある『北の遺跡案内』や湧別町のホームページでも確認できる。

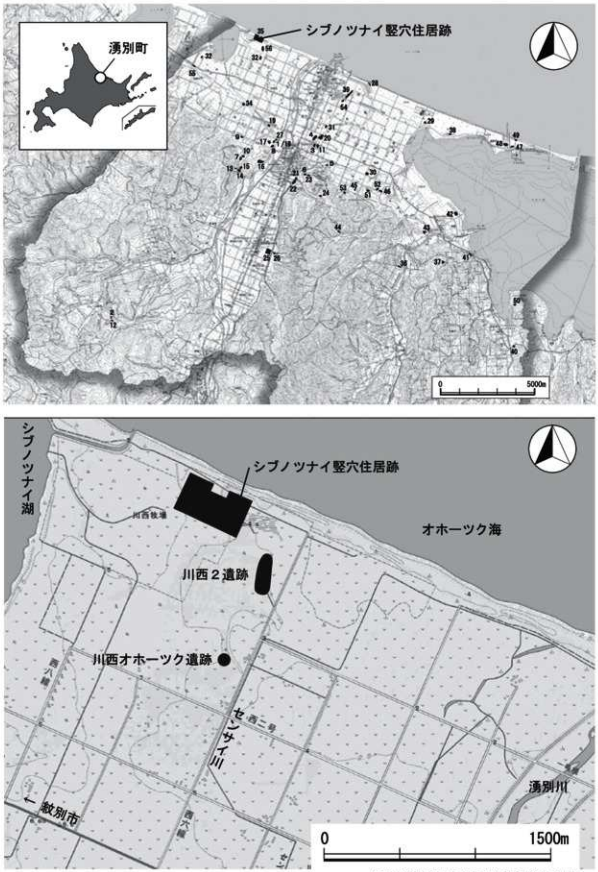


図１　北海道指定史跡「シブノツナイ竪穴住居跡」位置図

(2)　シブノツナイ竪穴住居群の立地

シブノツナイ竪穴住居群は北海道紋別郡湧別町川西499-1ほか、湧別町が所有する牧草地に所在し、東は湧別川の支流であるセンサイ川、西はシブノツナイ湖に挟まれた低平な舌状台地の先端部に位置している（図1下）。竪穴住居群が立地する舌状台地は標高4～5mほどで、台地の下には湧別川およびセンサイ川によって形成されたと考えられる河跡沼や湿地帯が広がっている。

竪穴住居群の北側には海岸線に沿って砂丘列が形成され、周囲にはハマナス、ハマニンニク、ハマエンドウ、シロヨモギの群生が見られる。南西部から南東部にかけてはミズナラ、カシワを主体とする保安林が広がり、北西部及び北東部の低湿部ではヨシやスゲ類が茂り泥炭が形成されている。シブノツナイ竪穴住居群やその西のシブノツナイ湖の名称に見られる「シブノツナイ」はアイヌ語を語源としており、「ウグイのいる川」を意味している。

道史跡となっている土地は湧別町農業協同組合により公営川西牧野の一部として利用され、竪穴住居群の南西側には受精施設などの牧野関連施設がある。毎年5月～10月はひと月に数日程度、約150頭の乳牛が竪穴住居群に放牧されている。

(3)　シブノツナイ竪穴住居群の概要

遺跡の特徴は、竪穴住居跡が埋まりきらずに窪みの状態で残り、密集した状態で地表面から確認できることである。窪みで確認できる竪穴住居跡は530基あり、平面形状毎に見ると多いものから方形が326基、円形が176基、多角形が20基、絵鏡形が8基である（図2）。方形が約6割を占めていることから、主に擦文文化期に形成された竪穴住居群だと考えられる。墓域や貝塚は確認されていない。

3．調査の方法と成果

(1)　調査区の設定

調査に必要となる基準点と測量基準杭は、平成27～29年度の道埋文の調査、平成30～令和2年度の町教委の調査で設定したものを継続して使用した。測量調査杭の名称は「南北ライン－東西ライン」で表している。今年の調査のため、新たに2本の杭（21-22,24-23）を設置した。

令和3年度は、314号竪穴と416号竪穴に調査区を設定した（図3）。選定理由は、314号竪穴は平面形状が方形の大型竪穴でありカマドの検出を想定した計画が立てやすいことと、竪穴の東壁に沿うように確認される高さ20cm程度の盛土の内容を確認することで何らかの特殊な要素を確認できる可能性があったためである。

416号竪穴は、平面形状が多角形であるがオホーツク文化であるか擦文文化であるかを出土遺物等に基づいて確認するためである。その背景には、近接する川西２遺跡の発掘調査で平面形状が円形及び多角形の竪穴も擦文文化という結果が得られていることがある。

一般的に、擦文文化の竪穴住居跡ではカマドは東または南の壁で確認される傾向がある。本遺跡でもその例に該当することを想定し、調査区は竪穴住居跡の中心から東及び南の各壁に向かって0.5m幅で設定した。それぞれ、東トレンチ、南トレンチと呼称する。

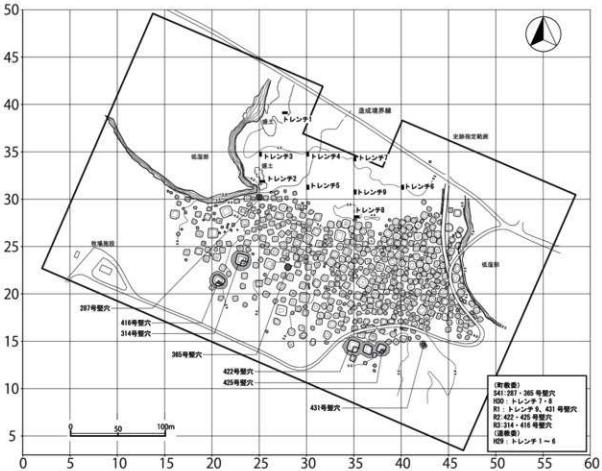


図２　シブノツナイ竪穴住居群　竪穴住居跡分布及び調査位置図（1:4000）

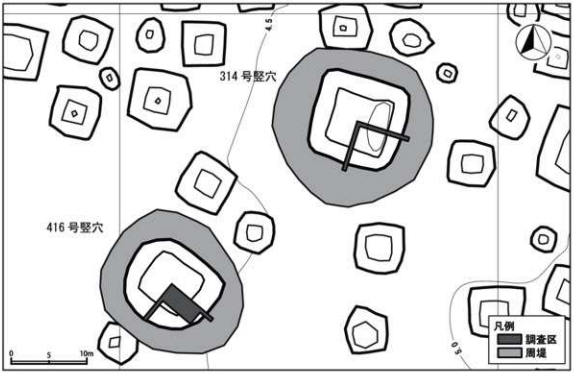
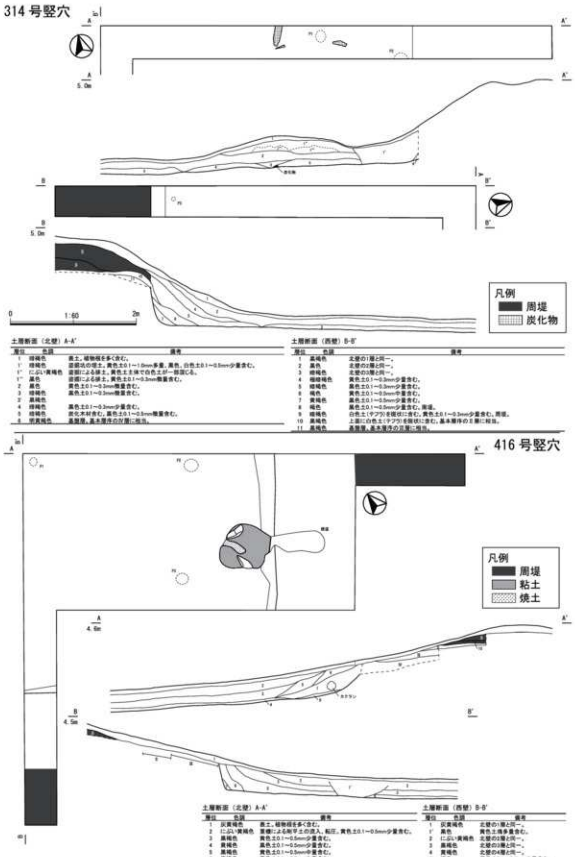


図３　314 号・416 号竪穴周辺平面図（1:500）



土層断面（北壁）A-A'

層位	色調	備考
1	褐灰色	表土、植物根を多く含む。
1'	褐灰色	炭窯攪乱の埋土。黄色土0.1～1.0mm多量、黄色、白色土0.1～0.5mm少量含む。
1''	にぶい黄褐色	炭窯による掘土。黄色土主体で白色土が一部混じる。
1'''	黒色	炭窯による掘土。黄色土0.1～0.5mm微量含む。
2	褐色	黄色土0.1～0.3mm微量含む。
3	褐灰色	黒色土0.1～0.5mm微量含む。
4	黒褐色	
5	褐灰色	黒色土0.1～0.3mm少量含む。
6	褐灰色	黄色土0.1～0.5mm微量含む。
7	黒褐色	黒色土0.1～0.3mm微量含む。焼土。

土層断面（西壁）B-B'

層位	色調	備考
1	黒褐色	北壁の1層と同一。
2	黒色	北壁の2層と同一。
3	褐灰色	北壁の3層と同一。
4	褐灰褐色	黄色土0.1～0.3mm少量含む。
5	褐灰色	黒色土0.1～0.3mm少量含む。
6	褐色	黄色土0.1～0.5mm中量含む。
7	黄褐色	黒色土0.1～0.3mm少量含む。
8	褐色	黒色土0.1～0.5mm少量含む。焼土。
9	褐褐色	白色土（ヤブツミ褐色）に含む。黒色土0.1～0.3mm少量含む。焼土。
10	黒褐色	上面に白色土（ヤブツミ褐色）に含む。基本層序の2層に相当。
11	黒褐色	基盤層。基本層序の3層に相当。

土層断面（北壁）A-A'

層位	色調	備考
1	灰黄褐色	表土、植物根を多く含む。
2	にぶい黄褐色	炭窯による攪乱土の流入。粘土、黄色土0.1～0.5mm少量含む。
3	黒褐色	黄色土0.1～0.5mm少量含む。
4	黄褐色	黒色土0.1～0.5mm少量含む。
5	黒褐色	黄色土0.1～0.5mm少量含む。
6	黒褐色	黄色土0.1～0.5mm少量含む。
7	黄褐色	褐色土0.1～0.5mm少量含む。
8	黒褐色	
9	黄褐色	黒色土褐色む。焼土。
10	褐褐色	黄色土0.1～0.5mm微量含む。焼土。

土層断面（西壁）B-B'

層位	色調	備考
1	灰黄褐色	北壁の1層と同一。
2	黒色	黄色土褐色量含む。
3	にぶい黄褐色	北壁の3層と同一。
3	黒褐色	北壁の3層と同一。
4	黒褐色	北壁の4層と同一。
5	褐色	黒色土0.1～0.5mm少量含む。
6	黒褐色	黄色土0.1～0.5mm少量含む。
7	褐色	
8	黒褐色	黒色土褐色む。焼土。

図４　314 号・416 号竪穴土層断面・平面図（1:60）

(2) 基本層序

シブノツナイ竪穴住居群で確認されている基本層序は、以下のとおりである。

Ⅰ層　表土。植物の根が密に入り込んでいる。

Ⅱ層　黒色土。層厚10～20cm の腐植土層。遺物包含層。旧表土。まれにテフラを含む。

Ⅲ層　黒褐色土。腐植土。やや粘性がある。

Ⅳ層　暗オリーブ褐色。漸移層。

Ⅴ層　黄褐色粘土。しまりが非常に強い。

Ⅵ層　にぶい黄橙色粘土。しまり、粘性が非常に強い。

(3) 発掘調査成果（概要）

方法　掘削は、表土はスコップ、竪穴埋土は移植ごてで土層の変化に注意しながら層位ごとに進めた。遺物は、床面出土及び出土位置が重要と考えられるものは位置を計測し、その他は層位ごとに一括して取り上げた。埋戻しは後年の検証調査を考慮し、埋土を詰めた土のうを床面から敷き詰めた。ただし、表土分については不織布を敷いた上から土を直接戻した。調査地の一部が保安林内であるため、該当範囲の掘削については北海道オホーツク総合振興局産業振興部林務課の許可を得て行った。

【314号竪穴】（図3・4）

形状と規模　方形、長辺11.2×短辺10.6m、深さ0.89m、面積118.7㎡

土層　竪穴はⅣ層を掘り込んでおり、床面直上に暗褐色土、その上には黒色土が堆積する。北壁の1'～1'''層は土の状態や土層下端が床面で止まっていることなどから盗掘に由来するものと判断した。東壁に沿うように認められる盛土は、カマド検出のために東壁付近を集中的に掘削した際に生じたものと考えられる。南壁付近では、壁の崩壊や周堤土の流れ込みに由来すると考えられる三角堆積が確認され、壁の外側では堀上げ土による周堤が確認できた。周堤の下には旧表土が確認でき、その層位中にテフラと考えられる白色土が斑状に確認できた。

付属遺構　柱穴を3基（P1～3）確認したが、プランの確認にとどめ掘削は行っていない。カマドや炉は確認できなった。

出土遺物　床面直上の遺物は10点弱で南壁付近に集中していた。土器は擦文土器片で、坏は口縁部にヨコナデ、体部には斜め方向の沈線が確認できる。甕は胴部でハケ調整が確認できる。礫は長さ10cm 弱の大きさの揃った楕円形のものが南トレンチで4点まとまって出土した。東トレンチでは炭化木材が出土した。

時期　出土遺物から、擦文文化後晩期と考えられる。

【416号竪穴】（図3・4）

形状と規模　多角形、長辺12.2×短辺10.7m、深さ0.59m、面積110.1㎡

土層　竪穴はⅣ層を掘り込んでおり、床面直上には黄褐色土、その上には黒褐色土が広く堆積する。全体に堆積する2層は黄色土を含み極めてしまりが強く、一部でビニール袋が混入していた。また、竪穴の上端部分で表土直下に旧表土や基盤層が確認できたため、この竪穴の周堤は一部が削られその土が2層として窪みに堆積したと判断できる。東壁及び南壁の外側では掘上げ土による周堤が確認できた。周堤の下には旧表土が確認でき、その層位中にテフラと考えられる白色土が斑状に確認できた。

付属遺構　当初設定した調査区ではカマドが検出されなかったため、東トレンチを南側へ2m拡張した。その結果、白色粘土のまとまりと袖石と考えられる礫、焼土と炭化物が混じる土が検出され、カマドと判断した。カマド奥壁の外側では煙道の痕跡も確認できた。そのほか、柱穴を3基（P1～3）確認したがプランの確認にとどめた。炉は確認できなかった。

出土遺物　床面直上の遺物は20点程度確認できた。カマドの右側と南トレンチの壁際でまとまって出土した。カマド右側の土器は擦文土器の甕であり、残存部分は口縁部から胴部まで全体の3分の1程度である。口縁部は斜め方向の刻文をもつ2段の隆起帯を有し、内側に屈曲する。胴部は5本程度を1単位とする鋸歯文が巡り、その下部に横方向の沈線が1条、さらにその下部に斜め方向の短い沈線が5本程度を1単位として等間隔に施されている。そのほか坏の口縁部、紡錘車が出土している。礫はカマド右側から棒状のもの等が7点出土している。

時期　出土遺物から、擦文文化後晩期と考えられる。

4．普及活動

例年、地域の教育関係者に対して発掘調査の実施を周知し、現地見学を受け入れている。しかし今年も新型コロナウイルス感染症の影響があったため、以下の事業のみ感染症対策をとり実施した。7月30日、発掘調査親子見学会。11月20日、遺跡調査報告会。

5．成果と課題

(1)　竪穴住居跡の時期特定と自然科学分析

調査目標にあげた2点、①カマドの検出、②竪穴住居跡の年代が特定できる資料及び試料の収集採取、は共に達成できた。平面形状が方形の314号竪穴が想定通り擦文文化だっただけでなく多角形の416号竪穴も擦文文化のものだと確認でき、近接する川西２遺跡の調査結果と同様の傾向がつかめた。ただし、416号竪穴は近年の削平等の影響を受けているため、平面形状は自然の埋没過程を反映したものではない。竪穴群全体の正確な時期の傾向をつかむためには、自然の埋没状況を残した方形以外の竪穴での調査が必要である。

採取した試料について、3種類の自然科学分析を行った。1つは火山灰同定である。分析の結果、旧表土中で確認された白色土はMa-bと同定された。他の2種類の分析は放射性炭素年代測定と炭素・窒素安定同位体比測定である。年代測定では、試料の多くで11世紀前半から12世紀中頃の年代が得られている。同位体比測定はまだ結果が出ていない。各分析の詳細データは総括報告書で報告予定である。

(2)　今後の調査

次年度も今年度と同程度の規模で発掘調査を行い、遺跡の特徴や年代など保護や活用を進めるために必要な情報を収集する予定である。具体的な調査内容は令和3年度第2回調査検討委員会で検討を行う予定である。

引用・参考文献

報告書等

網走市立郷土博物館　1990『網走市立郷土博物館収蔵考古資料目録第4集「オホーツク沿岸の遺跡」』

北海道立埋蔵文化財センター　2015『重要遺跡確認調査報告書第10集』
2016『重要遺跡確認調査報告書第11集』
2017『重要遺跡確認調査報告書第12集』
2018『重要遺跡確認調査報告書第13集』
2019『重要遺跡確認調査報告書第14集』
2020『重要遺跡確認調査報告書第15集』
2021『重要遺跡確認調査報告書第16集』

湧別町教育委員会　2019『北海道指定史跡シブノツナイ竪穴住居跡　発掘調査報告1』
2020『北海道指定史跡シブノツナイ竪穴住居跡　発掘調査概要報告書（2019年度）』
2021『北海道指定史跡シブノツナイ竪穴住居跡　発掘調査概要報告書（2020年度）』

青柳文吉編　1995『北方民族博物館調査報告　湧別町川西遺跡』北海道立北方民族博物館

大場利夫　1965「湧別町古代史」『湧別町史』　湧別町
1966『湧別町シブノツナイ遺跡調査概要』　湧別町教育委員会

熊木俊朗　2016『擦文文化期における環オホーツク海地域の交流と社会変動 - 大島2遺跡の研究（1）-』東京大学大学院人文社会系研究科付属北海文化研究常呂実習施設
2021『アイヌ文化形成史上の画期における文化接触：擦文文化とオホーツク文化 - 大島2遺跡の研究（1）-』東京大学大学院人文社会系研究科付属北海文化研究常呂実習施設

米村喜男衛　1961『川西遺蹟調査報告』網走郷土博物館シリーズ　網走市立郷土博物館

米村喜男衛　1981「北海道紋別郡湧別町川西遺跡」『北方郷土・民族誌』3　北海道出版企画センター

米村哲英　1963『北海道紋別郡湧別町字川西シブノツナイ遺跡調査概報』湧別町

論文等

大沼忠春編　2004『考古資料大観 第11巻　続縄文・オホーツク・擦文文化』小学館

熊木俊朗　2018『オホーツク海南岸地域古代土器の研究』北海道出版企画センター

小疇尚・野上道男・小野有吾・平川一臣編　2003『日本の地形2　北海道』東京大学出版会

榊田朋宏　2016『擦文土器の研究』北海道出版企画センター

塚本浩司　2002「擦文土器の編年と地域差について」『東京大学考古学研究室研究紀要』17　東京大学考古学研究室

戸苅賢二・土屋篤　2000『北海道の石』北海道大学出版会

長尾捨一　1962『5万分の1地質図幅説明書「中湧別」』北海道開発庁

中田裕香　2016「大場利夫と竪穴群」『北海道考古学』第52輯　北海道考古学会

藤本強　1988『もう二つの日本文化』東京大学出版会

本間源治　1928「湧別沿岸紀行」『郷土研究』創刊号　北見郷土研究会

町田洋・新井房夫編　2003『新編　火山灰アトラス - 日本列島とその周辺』東京大学出版会

横山英介　1990『擦文文化』ニュー・サイエンス社

報 告 書 抄 録

ふりがな	ほっかいどうしていしせき　しぶのつないたてあなじゅうきょあと　はっくつちょうさがいようほうこくしょ（2021ねんど）
書名	北海道指定史跡　シブノツナイ竪穴住居跡　発掘調査概要報告書（2021年度）
副書名	史跡内容確認のための調査
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	林　勇介
編集機関	湧別町教育委員会社会教育課ふるさと館JRY・郷土館
所在地	〒099-6325　北海道紋別郡湧別町北兵村一区588番地　TEL01586-2-3000
発行年月日	西暦2022年3月20日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		日本測地系		調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
シブノツナイ 竪穴住居群 （道指定史跡 シブノツナイ 竪穴住居跡）	北海道紋別郡 湧別町川西 499-1・2,502-1・2,503,714,717～720,722-1～3,930,1056,1059-1	15598	1-21-35	44° 14′ 40.14″	143° 34′ 32.56″	2021.7.15 ～.8.11	21.45㎡	史跡保護のための詳細分布調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
湧別町 シブノツナイ 竪穴住居群 （北海道指定史跡シブノツナイ竪穴住居跡）	集落跡	続縄文文化期 擦文文化期	窪みで残る竪穴住居跡が530か所。 竪穴は4～7m規模の方形を呈するものが主体であるが，10m前後の大型のものが15か所見られる。	擦文土器，紡錘車	大型竪穴住居跡2基でトレンチ調査。

図版 1

1　シブノツナイ竪穴住居跡（北から：3月）

2　シブノツナイ竪穴住居跡（西から：7月）

3　シブノツナイ竪穴住居跡　314号竪穴（真上から：7月）

図版２

1　314号竪穴 調査区完掘（北から）

2 314号竪穴 炭化木材出土状況（西から）

3 314号竪穴 北壁土層断面

4 314号竪穴 西壁土層断面

図版 3

1　314号竪穴 西壁土層断面（周堤部）

2　314号竪穴 全景（西から）

3　416号竪穴 調査区完掘（北西から）

4　416号竪穴 北壁土層断面

5　416号竪穴 北壁土層断面（周堤部）

図版４

1　416号竪穴 カマド

2　416号竪穴 西壁土層断面

3　416号竪穴 調査風景

4　416号竪穴 出土遺物

北海道指定史跡
シブノツナイ竪穴住居跡
発掘調査概要報告書（2021年度）

史跡内容確認のための調査

発行年月日　2022年3月20日
編集・発行　湧別町教育委員会
〒099-6325　北海道紋別郡湧別町北兵村一区588
湧別町ふるさと館 JRY・郷土館
電話 (01586)2-3000
印刷　北湧印刷
北海道紋別郡湧別町緑町99番地